
クレイジーラブユーダイフォーユー

全自動鎖骨店

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレイジーラブユーダイフォーユー

【Nコード】

N6575W

【作者名】

全自動鎖骨店

【あらすじ】

「胞子囊」と呼ばれる汚染災害により、文明が崩壊した近未来の地球。力のみが全てを支配するここカントウヘイヤでは、地元ゲリラと国連治安維持軍・APKFが「ペイン・ローダー」と呼ばれる戦闘機械を操り日々壮絶な戦闘を繰り返している。

“戦場のビッチ” 凄腕の女傭兵・ユーヤ。
残忍な難民の少年。

天皇家最後の生き残り・沙耶子。

三人の邂逅がもたらす運命の結末や如何に？

実験的な作品のため敢えて雑な書き方をしています

prologue：彼女の場合／彼の場合

深く息を吸い込め。

目を閉じれば、そこにはあたしの骨が見える。

野良犬に齧られてざまあ無いさね。

さあ、あたしを殺してみな。

でもその前にあたしがトリガーを弾いたら、戦争の女神はあたしに
頬笑むのさ。

ビッチ and ロッキン。ブラザーファックユー。

愛しているぜ。纏めて死にやがれ。

鋼鉄の腕をあたしはブン回す。

クラブ（カニ野郎）に出会ったら、ケツを捲って逃げな。男の子
だろう？

世界は僕に試練を与えているようで、例えば今日一日、ひとかけらのパンの水だけでさあ生き延びてみる、って　土台、無理な話。

意地汚い神様は僕らの命を弄ぶから、昨日はヤンが死んで、それから、一昨日は僕の兄が死にました。さほど悲しくはありませんでした。

地雷を踏むほうが馬鹿だからです。

僕は裸足で逃げていたので、足が痛くて、マメはもう潰れぐちゅぐちゅに化膿しはじめていたので、幼い女の子たちを脅して靴を奪いました。

それから「服を脱げ」とも脅して、彼女らをレイプもしました。

あばら骨の浮いた長女にナニをしゃぶらせている時、僕はこの世の虚しさを何故か悟ったのです。

妹が僕を殴ったので、僕は仕返しに石を投げ付けたら彼女は死にました。

可哀想なのでお姉さんもその後殺しました。

食べ物が無くて、今はひもじいです。

1: B i t c h

カノンの砲身が破れて、被弾と共にガッデム、あたしの全身が激しく揺さ振られた。FCSのランプが一つ灯った。同時に警告音。

五月蠅えな。分かってるよ。

一々それに慌てる雑魚は阿呆だ。

アクセルを蹴り込む様踏み出す。機体は青白くブーストの火を灯して、残り少ない推進剤を減らして加速。瞬間、700Km/hオーバー。

カウンタースト。加え、ほぼ直角にターン。

急制動・急旋回して遮蔽物の影に飛び込む。タッチ・ダウンと同時に背後のビルは崩れた。

爆風。敵のミサイルは容赦なく死神の通り雨をもたらす。今夜の天気予報は、火事雷それから流れ弾にご注意！

背中から激震が走った。

ジャマーは既に壊れ使えない。包囲網は徐々に狭まりつつある。

頭半分顔を覗かせた所で、被弾。スピア弾にセンサを持っていかれた。

装甲破損。被害甚大。真っ白なノイズ。ツキも何も有りやしねえ。

アモ（弾丸）を確認する。フレシエット弾、二つ。スモーク弾が残

り一つ。

やベエな。 いよいよオダブツか。

でも、それを望んでいる様な気がしたし、また一方でお迎えはクソ食らえだぜ、と意気がっている自分もまた居る。

しゃらくせえな

白黒ハッキリしやがれってんだ。

コッキングレバーを押し戻し、ショットシェルを装填 揺るぎない覚悟を、唾と共に飲み干した。

ショットガンの筒先を敵へと構えた。イチ、二のサン ！！の
タイミングで仕掛ける。

ダंकシュートを見せてやるぜベイバー！

照準は、真っ直ぐ400メートル先のピザ野郎を捉えていた。

メタボな土手っ腹にあたしの殺意をお見舞いしてやる。 槍で突き刺し火薬でローストしてやる。

敵マシンの股関節にぶら下がる卑猥なターレット。突き出たバルカンの上部に装着されたTADS 監視・索敵用光学システム並びレーザー測距装置が、こちらの影を捉え、反応。砲身を唸らせ、フアッキンベイバーなアーマー・ピアシング弾の雨を散らす。

装甲が風がれ、右足の第二関節が吹っ飛ぶ。メシヤツと軋み、次い

であたしの足並みが乱れる。だがまだファイナーレでは無い。

ギムレットにはまだ早い。根を上げぬ意地っ張りなオート・バランスは、重心点を移動し左腕を地に擦らせる。

瓦礫の轍に触れて、掌を広げ踏ん張り同時に左足はスパイクを立てる。

急制動がかかり機体は減速する。だが、姿勢がよろめいた瞬間、あたしはトリガを絞り鋼鉄の矢をつがえていた。

フレシエツト弾が。

翔んだ。

風を切った。

サボットが花開いた。

戦場で戦場でダンスを踊れ。種子は死を求めん。

鋼の同胞達と交錯し、すれ違い。別れを告げ。

見送り「ザマミロ」とあたしが口元に皮肉な笑みを浮かべた途端、鋭い矢尻の先端が敵機の中央部まで到達。運良く風に流されずに済んだ。

そいつはフィンまで奥に食い込み、中のパイロットを押し潰す。

骨を碎き、胸を割り開いた。

夥しい血がシートの上に広がり、コクピットは生臭い棺桶へと姿を変える。

ここではそれを止める事は出来ない。唯ありのまま、淡々と敵を殺し続けるしか無い。それ以外の目的も知らない。

スタビライザがもってかれた。

いらねエ。

振動で軸がずれた。

直ぐに持ち直した。

横風がどこから流れていた。

主を失った機体は、シヨンベン小僧みたいにコックの先から弾丸のキスを浴びせ続ける。

ファツキュー！

さつさと逝きやがれ！

お呼びじゃねえんだよ。

ガクガクに震え始めたサスに、根性見せてみな、と、どこぞの姉御さながらトドメの鞭を打つ。

オーヴァ・ブースト。

車輪を軋ませながら、豪快なパワー・ドリフトを決める。

ワナビ・ワナビ・ワナビィ

ダイアナ・キングを口ずさみながら、あたしは渾身の一撃の矢を放った。

ファイア！

あたしのスペシウム光線を存分に味わいやがれ

！！

あれ？

直後。何故かあたしの視界がブラック・アウトした。

なんか、目が全く開かねエ……………

2 : Tokyo (前書き)

今回は文量少なめです

2 : T o k y o

「……東の果てに、その昔蟹道楽っていう店があって、その大将と俺が親友で」

なんだ畜生。腹が減ったな無性に。

長い。夢を見ていた。

空中ブランコに揺られどうやらあたしがそれを操っている。 八
ア？ 中々にメルヘンだぜマジ糞ダセエ。

ゆあーん ゆよーん

ゆやゆよん

チューヤ・ナカハラは最高にイカす野郎だ。

ブランコの軋みがやがてローターの羽音に変わり、あたしは夢から目覚める 悪い。全然長い夢じゃ無かったわ。途中からすつぽり抜け落ちて全く覚えちゃ居ねえ。

それより、此処は何処だ……？

風が傷口に凍みる。

ベルトが肩に食い込み、どうやらコクピットの未だ中なのだと知る。

……っか、何故頭が重い。

下を向き、機体を吊り下げられたまま何処かへ運ばれている。ローター音に聞き覚えがある　国連暫定平和維持軍……。

バーロー、あたしの商売の目の敵じゃねえか。

降ろせ。いやちと待った今の発言は取り消す寧ろ運べ。そのまま。

ハッチ・カバーは抜け落ちていた。風が機内に吹き込み、眼下には錆色の馬鹿デカイトウキョウ湾が映る。ミナトクオダイバ　レインボウ・ブリッジ　の、橋桁の腐り落ちた残骸。

この街はもう駄目だ。

っか、世界そのものが最早崩壊。

ウィルスが全て作り替えてしまった。カントウヘイヤー帯が、今や難民のさまよう荒れ果てた死の大地へと変わり、赤茶けた土を晒している。

クレーターの底に、巨大な孢子嚢が森を形成しつつあった。

3: Snipe (前書き)

この世界の野生生物は突然変異しています

3 : Sn i p e

季節を忘れた渡り鳥達の群れが、白い沼に降り立ち羽根を休めている。

カスミガウラの住人達は、各々の手にライフルを携え、それを待ちかまえていた。

カモフラージュ用のギリ・スーツに身を包み、草むらに腹這いとなる。

プローンの姿勢。

奴らの様子を伺っていた。

夜気に濡れ、彼らの足下はぬかるんでいた。

狙うはワンシヨット・ワンキル 野生動物は勘が鋭い。一撃必中を心掛けねばならない。

先頭の大男が構えるのは、SVDドラグノフ。野戦用の頑丈な作りが売りの狙撃銃。旧ソビエト製。

銃本体に標準装備されたPSO-1四倍スコープは、光学照準器を備えているが、今はスミアが発生しノイズで見えない。

隣にいる仲間に、男は目配せした。僅かに顎が動いた。

オリーブ色の、草地に溶けるかの様な色合い。アイアン・サイト標準装備の、サコー・TRG-21スナイパーライフル。フィンランド製。こういう時アドリブが利く。

ステンレス鍛造製のヘビー・バレルを、そちらに向け僅かに射点をずらした。

バットプレートはポリウレタン製で長時間の射手の疲労を和らげてくれる。

唯ひたすらに、影を追跡。動くのを狙う 那須野与一の様に。

シモ・ヘイへの意志を纏う。

何度目か。ポンチヨの縁から、また雫が喉元へと零れ落ちてくる。二脚架で支えられているとは云え、ライフルは微妙に揺らいでい

た。照準の位置が、狙点に戻るまで堪えた。血中のアドレナリンが増幅してゆく。

腹這いの姿勢で、足はやや開き気味に。首を持ち上げ、右の人差し指を引き金の外枠　トリガーガードに添える。

7・62ミリNATO弾は既に装填済み。風が左前方からそよいでいる。落差　凡そ十五センチ。誤差、マイナス五センチ以内と予想。

横隔膜を一杯に広げ、体内に酸素を取り込む。

呼吸に合わせ、体は上下に動く。

それに合わせて銃口が沈んだ。今度はゆっくり鼻から吸い始める。人差し指を、ゆっくり引き金へ添える。後方を支えるよう銃把へ親指を添え、互いの無駄な力を打ち消すようにする。

指の腹で引き金を押し込む。

遊び（・・・）が消えた。

やがて撃針が雷管をぶつ叩いた。

音が。吼えた

空を裂き、螺旋回転。

弾丸が一方向へ導かれてゆく。

発砲と同時に、水鳥たちが一斉に羽ばたいた。

銃口が跳ね上がり、力強いキック・バックの反動がユーイチの肩を打った。骨までその衝撃が伝わった。脱臼しかねない程の強い力だ。だが、鍛えられたユーイチの肩は、その衝撃を充分に受け止めていた。銃口から煙が立ち上っている。

弾丸は獲物の肉を抉った。

否。

それに止まらず、破壊と鋼鉄の意志は標的の頸動脈を寸断。皮が弾け、骨まで粉碎していた。

狩りと呼ぶには、それはあまりにも過剰な威力だった。獲物の首から上が吹き飛び、傷口が顕わとなっている。

「ヨッシャああああ!!」

獲物をしとめた瞬間、その本人より高い声を上げ、草むらから飛び出してきた若者が居た。韓国出身の崔^{チェ}だ。

水を跳ね上げ我先に獲物へ駆け寄り、白濁した水面より首無しの死体を取り上げる。

滴り落ちる鮮血が、彼の袖口を汚していた。

大鴨肉は最高の御馳走なのだ。

「やったなユーイチ！ 今夜は御馳走だぜ！」

満面の笑みを浮かべ崔が語りかけた時、その頭上を、大きな騒音を放つ何かが通り過ぎた。

水面が揺れている。

思わず彼らは真上を見上げた。

鳥か。

否、あれは国連平和維持軍 A P K F が所有する大型輸送ヘリだ。

編隊はけたたましく風を掻き分け、東の空へと渡ってゆく。

ユーイチが顔をしかめながら呟いた。

「畜生……。またペインローダーなんか拾って来やがって……」

彼が見上げるその胴体下には、先程大破した彼女の機体が吊り下げられていた。

4：冬・野戦病院・そして嘆きの土地

神経がツンツンに尖っている。尖りまくっている。

ホワイ？ 何故か？

ビコース。 単純明快。

寒みいからだ。クソ寒いからだ。

国連軍の手によってあたしが運ばれた野戦病院のテントではいつも隙間風が吹き込む。ストーブが全然足りない。

てか、穴を塞げ。

病院ってのは……普通「壁」のある建物の事を指すんじゃないの？

国連軍も意外と貧乏。砂嵐に布地が波打つ。

つか、誰かあたしを起こしてくれ。

あたしは今、全身ギブスでガチガチに固定されまくり状態なのだ。

背中が無性に痒い。掻きまくりたい。中で蛆が湧き始めている。

節子の母親みたいに死ぬのは嫌だ。死ぬ時は綺麗に逝きたい。

真空パックで。あたしの身体を永久保存して。

野戦病院に入る事早二ヶ月。

12月24日。世間で云う所のクリスマスって奴だ、は！
神様なんざクソ食らえ。此処にはんなチャライモノ祝う馬鹿は居ない。

基、一名馬鹿が居た。やたら猫を被った、愛想ばかり振りまくるあのホルスタインナース。

真っ先に頭がいかれて、サンタのコスプレでファックしていやがった。しかもあたしの真横で。

狸寝入りを決め込み翌朝その事を告げたら、顔を真っ赤にして俯いていた。ウブだねえ。

よし、お前奴隷決定。

今日からあたしのパシリな。

取り敢えずどうしたらそんなに乳デカくなるのか教える。いやマジで。頼む。

畜生。暇で暇でたまんねえなああもう！

世界の果てに ボッサノヴァが鳴り響いて。

機嫌の悪いパレード どこにも歩く気配がない。

さよならLADY。

健康なる二十歳の若者は、健全なる愛国心と忠義をもって薬を打ちましょう。

ナノ・テクノロジーの恩恵にあやかり、あなた方は戦場の恐怖に怯える事はありません。

薬が麻痺させてくれます。

銃は訓練で慣れます。

死後、ご家族の生活保障は政府がお約束致します。

嘘つき共め。纏めて死にやがれ。

なあ、世の中腐ってると思わないか？

キムチと違って発酵は不要。この世に賞味期限なんかありやしねえ。

そしてケチャップを今日もブチまける！

また誰かが死んだ。

このテントのベッドに、次第に空気が目立つ様になってきた。

世界は腐っている。

仕方がない。

外では芥子の花が開き、白い真綿が大地を被う。

美しくも儚く、そしてどこか。歪んだ世界。

子供が大麻を吸う。仕方がない。

親がそれを教え、時々子供を折檻する。仕方がない。

そして、子供たちは親に復讐する。

この世に悲しみの輪が溢れ、憎しみは増大し。やがて混乱と、暴力の波が全てを包み込まんとする。

とてもとても大きな力だ。

まるで獣の様。怪物の鋏は全てを押し流し、大地を不毛の土地に作り替えて行く。悲しみの穂しか実らない。

聖職者は書を捨て焚き火を燃やす。灰は天へと巻き上げられ、呪いの言葉として地に酸性の雨をもたらす。

顔の無いイエス・キリスト様が、小便とクソにまみれ瓦礫の山の中に横たわっている。

最早誰も見向きもしねエ。

5：息子が死ぬ時

オデイオの地と呼ばれる土地がある。

それは、この世の全てなのかも知れない。また、戦場そのものを
スラング
表す俗語。

元は、ラテン語で“増悪”を指す言葉だ。

ペイン・ローダーは風を切る。

増悪と失意に溢れた不毛の大地で唯一その存在を主張し、戦闘と云う行為そのものに存在意義を見いだす、最高にクソツタレな乗り物だ。

そして、そのクソツタレな乗り物を振り回すのがこのあたし。即ち、あたしも等価値で結ばれている、クソまみれの阿婆擦れなのだ。別にそれを悪いと思った事はない。

この世は力が全てだ。

あたしの職業はクソツタレで誇るものなど何一つありやしないが、このペイン・ローダーだけは別物だ。

あたしが独自にチューンを施し手懷けた超一級品。

子供を産めない代わりに最高の愛情をかけて育てた、愛しのマイ・サンなのだ。

その息子^{マイ・サン}が死んでいる。

あたしが幾ら呼びかけても動かない。

ヘイ、どうした相棒。

拗ねているのか？

それとも悩みでも抱えているのか？

照れずにママに話してみろってんだ。ドアを開けな。

ペイン・ローダーは動かない。

雨に打たれたまま動かない。

「かに道楽」のふざけたコピーを背中に覗かせて……動かないでいるのだ。

あたしの愛機は、死んだ。

動かない（……）。

森羅万象。

物事って奴はループする。即ち、自然回帰。骨は土に帰るのさ。

ハッ！ 便利な世の中だ。

神様はエコが好きなのかね。糞食らえだ。

あたしは骨の髄まで反骨精神バリバリのアバズレなので、死ぬまで一人マイノリティを貫く。

パンクスピリッツだぜ。ヤー。

シド・ヴィシャスみてえに生意気吐いて上等。

マシンも地球にはやらねえ。

くたばるなら最高にこの世を汚してからくだばってやる。

さあ。リペア開始。

ステイル・ネバー・ダイ。

コンセプト。そう、コンセプトだ。

何事に於いても、計画って奴が大事。段取りの悪い奴は後で失敗する。ここでは生き残れない。

だから、あたしは愛機にもう一度息を吹き込ませる事を決めた。砲弾を受けひしゃげた装甲をひっぺがし、更に中のフレームを取り出す。骨はばっちり大腿骨以下死亡だ。脊髓、腰骨はおるかメインフレームは全て交換だな。意外とこれが痛い。

エンジンはそもそも寿命だった。

騙し騙しワン・オフモデルの部品を使ってきたが、いよいよ今回でいかれた。

老朽化したノズルは火を噴いた。オーヴァ・ブーストが止めを刺したらしく、見れば中身が完全に焼き焦げていた。

ニッケルが溶けて異様な臭いを散らす。口ん中には苦い唾が溜まりやがる。

電子機器は端から使えない。

焼け落ちたフレームは強度が脆くて、そのままジャンク行きだ。屑鉄屋が喜んで持って行くだろう。いずれそれらは、都市の建材へと生まれ変わる。

クレーンで吊り下げられた機体から、まだ使えそうな部品を拾い上げてゆく。

およそ一週間かけ吟味し倉庫の床の上に残されたのは、

6：難民襲撃地区

やっぱり、新しい靴はいい。

人間、なかなか裸足には慣れないものってんだ。

一步一步踏み出す度、あの姉妹の恨みが大地に刻み込まれて行くような錯覚に陥る。

僕だけじゃない。この世は、皆そういうものだ。

陽炎の先に、戦車。

戦車戦車戦車　至る所、戦車の残骸。

APKFの白い戦闘車両がゲリラの襲撃を受けまたやられたんだ。ステルス迷彩地雷の威力って、凄いなあ。

突破された防衛ラインの先には、難民キャンプがある。

破れたフェンスの中はまさに地獄そのものだ。生々しい臓物と血の臭いがそこいら中に蔓延している。

腐った泥水が溜まる轍の上には、幼子と父親が折り重なり合うように倒れ。水面には紅い炎が、まだちらちらとその舌先を覗かせていた。僕の頭は、もうこの地獄図を単なる風景の一部と受け入れ始めている。

蠅が集る熱い泥水の上を、僕はまたいでゆく。

井戸では兵隊さんのブルー・ヘルメットをバケツ代わりに水を汲んで、それを浴びるよう飲み干した。それから地面に穴を掘って、その穴の中で暫し休みを取る。

砂漠の直射日光はきつい。

井戸の周りの木々は痩せ、実を付けずに枯れ始めている。

水は腐りかけ僕は下痢をする。そのまま脱水症状に陥る。穴の中で、糞の臭いを嗅ぎながら死が近づくのを悟った。

ピュリッツァー賞を取った写真に、いつだったか似たような場面があったつけ。

あれは……栄養失調で道に倒れた一人の女の子を、近くにいた力

ラスがじっと見つめ、その娘の死を待ちわびていると云う衝撃的な内容だったかな……。何故直ぐに助けなかったのだと、彼はひどいパッシングを受けた。

確かその後、写真家は心を病み自殺した。

彼はちゃんと、その娘は助けたと云うのに。

朦朧と揺らぐ僕の頭の上を、禿鷹どもは旋回している。鳶とびのようだ。鳶なんて、とつくに死滅している。

胃の中がひりひり焼き付き始めた。お腹が痛い。ふくらはぎや二
の腕が、熱を持った様に熱い。

熱い。

[illegible]

痛い。

尻を丸出しのまま、穴の中悶える姿はさぞかし無様だ。愚かで醜い。なんとも救い様すら無い。

ああ、ああああと亡者の様呻き声を上げて。それでも何も起こらず、ただ苦痛が延々僕の体を蝕む。脊髓に滅べと命じる。

赤い風がどこからか轟と呻り声を上げて、やがて砂嵐を呼び込む。竜巻が何もかも天上へと吸い込み、滅びを告げる。逃げなきゃ。

だが、僕の体はもう動かない。壊れてしまっている。死を待つ瞬間は、ただ恐ろしく。そして何故か長く。

引き延ばされたほんの数秒の間に、僕は死が実は、とても優しい物なのではないか。そうささやかな幻想を抱く。

死は誰にでも平等に訪れ、この僕の耐え難い苦痛を終わらせてくれる。

ならばそれは、神が持つ慈悲だ。僕はそれを渴望する。

やがて竜巻が僕の体に砂粒を当て、剥き出しの尻の皮にはらばらと……………否。ばらばらと、まるで鞭を打つかの様に激しく当たり皮膚を引き裂いて行くのだ。

その耐え難さと言ったら！

土壤汚染された砂は体内で毒と変わり僕の体を蝕む。神経を焼く。

ああ、ああああ、ああああああああ！！！！

神様の慈悲など本当は存在しないのだ。

僕は漸くそれに気付いた。

煉獄の痛みの中で、僕は絶望を知る。

7：ワイルド・トレイル

赤茶けた大地にもうもうと砂埃を舞い上げ、トレイラーは行く。
タイヤは全部で十八連。ラリー使用の特注サイズだ。

ここまで来るとほぼ百足か戦車だ。三十トン近い重量を誇るローダーには、これくらいの処置を取らねば砂地に足を取られてしまう。一応、地面はアスファルトで塗り固められてはいる。だが戦争で傷つき誰も手入れをしない道とあつては、最早荒地と呼ぶにそこは大差無い。

オーマダーリン。

オーマダーリン。

オーマダーリンクレメンターイン。

陽気に歌を口ずさみながら、あたしは荒れ果てたカントウヘイヤを、行く。

砂地の表面からひよっこり頭を覗かせるのは、大抵瓦礫のコンクリート達だが、稀にイレギュラーが加わる。

倒壊したビルディングの表面を覆うように、黄緑色……若しくは、紫がかった赤の奇妙な植物がびっしりと蔦を絡ませて見せる。

トータムボールの様に高く高く、天を目指し伸び続けている荒野の森の植物。

あれが、孢子囊^{そう}だ。

人も、動物も、植物も。

有機物無機物あらゆる物関係なく取り込み、その中身へと侵食してゆく。

公式データに因れば西暦2064年夏。ここチバ・若しくはカントウヘイヤに落ちてきた孢子囊の親玉……すなわち隕石だ。そいつが地面に大穴を穿ち、爆風と衝撃で周囲260km圏内を尽く壊滅させた。雲は大気圏内へと広がり、やがて瞬く間に菌は世界中へと広がっていった。

そうして、この世は滅びた。

一世紀遅れでやってきた恐怖の大魔王サマは、ものの見事にこの世を作り変えた。ブラヴォー。神の造形は狂ってるぜ。ヤー。

そうして長い長い、混乱の時をあたしらは迎えたと言っわけさ。

クソツタレめ。

道は度々砂漠に埋もれ、悪路があたしに高度なハンドリング捌きを要求する。

前方に大岩！

咄嗟に舵を切る。

インからアウト。進入角度と逆方向に一瞬ステアを切り、ブレーキング。

フロント過重を増やしフェイントモーションへ突入。

アクセルオン。派手なスライド。ざざざざつ、と砂埃を舞い上げケツが流れる。視線は常に先を捕らえろ！

ドリフトアングルを調整して、いよいよコーナーから脱出。

ひゅー！ 冷や汗もんだったぜ！

正に命がけのダートコースだ。ラリーと違いナビが居ないのが辛え。

あたしは勘を頼りに、そうして砂漠の海を越えてゆく。

砂に埋もれたパーキング・エリア。

直射日光炎天下。

ただいまの気温、摂氏50度。こりゃ死ぬるな！

旅の途中タイヤが何回かバーストして、あたしはその度にギンギラお日様の下でピット・クルーの真似事だ。日陰をくれ！

あたしは車を降りる。

さて、一丁気合いを入れますか、と工具箱一式を取り出し、ジャ

ツキアップ。

馬鹿でかいタイヤのボルトを外してへえエンヤコラさつて、
重めえんだよこのクソツタレ！

硬くて手の豆が潰れちまったよ。一体どうしてくれる！

ジャツキの野郎がへたれて危うく押しつぶされそうになったり。

洒落にならねえぞ。

あたしやなんでこんな肉体労働しなきゃならねえんだっつーのッ
！！

ああああ……

すんげえビール飲みてえええええ………。

ミト・シティエリアまで、残り約四十キロ。
旅はまだまだ続く。

スポーツ医学曰く。本来人間は、喉が渴いた際に接種する水の量は、実際の3分の2程度で十分なのだそうだ。“ターザン”を読んでその昔仕入れた知識だ。ありや、中々面白いよな。

因みに、胃を冷やすためがぶ飲みは禁止らしい。

知ったこっちゃねえな。

ボルヴィックのボトルの栓を開けて、1.5Lを一気飲みだぜ。美味え！

汗を吸いまくった下着のアンダーシャツを脱ぐ。

トップレスだぜ。ナウ。

風が気持ちいいね。

西日が地平の彼方に沈む。気温が一気に冷えてゆくこの瞬間が好きだ。

静寂は殺伐としたこの無情の大地を癒す。ほんの僅かだがどうでもいいんだよ、ンなことあ。

コールマンのランタンに火を灯す。ほや（・・）に火を付けると真っ白な強い光がそこに生まれ、陰は去りゆく。それからあたしはコーヒーを煎れる。しがないインスタントだけれども。

そして不意に、満天の夜空を見上げた。

「星が……きれいだなあ……」

胞子嚢が人類を脅かして、唯一良かった事。

空が綺麗になった。

コペルニクスも大満足だぜ。スゲエ。

「『澄んだ闇の星をのぼって来て、銀系にからみつけた蛍のむねのやうにちらつく』」

テニスンだったな。プレアデス星団がばっちりだ。

「ケラエノ、エレクトラ、タイゲタ、マイア、ステロベ、メロ
ペ、アルキオネ　　すはる 昂」

あたしの指先は、天の星々をなぞってゆく。

アトラスの娘たちプレアデス昇りつつあらば、収穫を始め、沈ま
んとする頃は耕作を始めよ。

四　の夜と昼、彼女らは隠れ、年のめぐるにつれて復たもう現わ
る。

その時はまず大鎌を磨ぐべし。これ野の掟なり。
(ヘシオドス／農作と日々)

夜が更けてゆく。

あたしはランタンの火を消し、そして眠りに就く。

8：東の天子（加筆ver.）

不毛の大地と化したカントウハイヤで、唯一汚染を逃れ植物が育つ土地があつた。

旧茨城県・某所。荒廃した日本の首都機能を兼ねるミト・シティから離れ、北へ約十一キロ。その地は、現支配者である皇族・宮家により厳重に管理されている。

もしこの土地を空から目にする事があれば、突然大地に現われる奇妙な円の集まりに、きつと疑問を抱く筈だ。

一つ一つの円は直径凡そ五百メートル程はある。中心からは一本の鉄の腕が伸び、それがゆっくりと回転しながら水を撒きつづけている。

土地の地下水を汲み上げ、更に農薬・肥料を混ぜつつ散布してゆくのだ。

アメリカ式の、主に乾燥した砂漠地帯で用いられる灌漑施設。センター・ピボットと呼ばれるこの様式はカントウハイヤ一帯の食料を担う、言わば生命線そのものである。

農園の主、沙耶子がこの土地を譲り受けた時、彼女は未だ六歳であつた。

あれから更に五年の時が過ぎた。

成長した沙耶子は楔を終え、先日正式に天皇として即位した。式典は厳かに行なわれた。

明けて翌日、未だ隣に摂政が控えるとは云え、沙野子は初めて公的に公務へ赴いたのである。

その華々しき仕事の内容は、この農園で働く小作人達への慰安訪問。

万全の体制を敷かれた警備は、完璧な筈であつた。

だ
が
。

彼女らの行き手には、思いも寄らぬ災難が待ちかまえていたの
ある。

出発前、ヘリポートでは沙耶子らが乗る迎賓用の白いヘリに続い
て、二機の攻撃ヘリが随伴していた。

エンジンスタート。それまで強烈に吹き付けていたダウンウオツ
シュの風が、機体が飛び立った直後に薄れていった。

ツインローター方式を採用し、互いの羽音を打ち消す構造をした
ロングボウ・アパッチ3は、音が静かだ。

機体の先端下部。瘤の様に突き出した各種光学機器及び、羽根の
真上に乗せられた皿状のレーダーから送られてくる索敵情報は、至
つて平穩。

今日は珍しく空は晴れ渡り、絶好のフライト日和。

「いいお天気だなあ……」

前方に広がる群青の空を見つめながら、そんなつい間の抜けた声
を、二番機のヤマナカは洩らしていた。

《気を抜くな。ヤマナカ》

忽ち先導する一番機の方角より、無線で叱咤の声が飛ぶ。

「うへえ、聞こえていたんスカあ!？」

まだまた新人の域を抜けない若者である。突然の檄にヤマナカは
肩を竦めた。護衛者としての自覚が足りぬと、さんざん無線越しに

怒鳴られてしまった。

「勘弁してくださいよ……これ、沙耶子様の方にも全部筒抜けなんですから」

「お前が気を抜くのが悪い」

いったい彼らはなにをやっているのかと、当の機体では苦笑と呆れ声が、同時に機内を埋めた。

「……申し訳ありません、陛下。後で私から重々言い聞かせておきますので」

付き添いの女官・サワタリは詫びるように幼い天皇へと告げた。

されど、本人は差ほど気にも留めていない様子だった。

「いいのいいの、エミさん。あの人たちだって人間なんだから。ずっと緊張ばかりしていたら、そのうち疲れちゃうわ」

可憐な雰囲気を漂せた少女は、そうにこやかに告げサワタリを諭した。

お優しい方だ、とサワタリは沙耶子を評した。前天皇の忘れ形見であるこの少女は、人を和ませる気質を確かにその身に備えている。訪問用にしつらえたシンプルなワンピースの裾からは、すらりとした少女の細い手足が覗いている。

腰下まで伸びる艶やかな髪。

瓜実型の頬は肌理細やかだ。白雪のような肌の上には、汚れを知らぬ円らな黒い二つの瞳が覗いている。

真珠のような輝きを秘めたその眼の内側には、母親譲りの聡明さが伺えた。

決して己の美しさを鼻にかけぬ事。慎ましくある事。皇室に代々受け継がれてきた、それは女性達の美徳だ。沙耶子もまたこれを賢く守った。

人の上に立つ者として、まだ子供ながらしっかりとした人格が備わっている事をサワタリは気づいていた。

（まったく、御母上によく似ておられる……）

サワタリは付き人として隣の沙耶子に、皇后陛下の記憶を重ねる。

前皇の代より、早十四年。

宮家に仕える事は、サワタリにとってこれ以上無い誉れであった。沙耶子の母親である瑠璃子皇后は、娘を出産し間もなく亡くなった。

皇后より子供を託されたサワタリは、実質的に母親代わりとして常に沙耶子の側を見守ってきたのである。

沙耶子は自分によく懐いてくれている。それが嬉しくて、ついサワタリは自分の目元を綻ばせた。

「……？　どうかしたの？　エミさん」

感慨深げに少女を見つめるサワタリの視線は、正に母親のそれと同義だ。なにかむず痒い特別な物を感じ、沙耶子は思わず訊ねるのだが

「いいえ」

当のサワタリはそつと言葉を紡ぎ、それ以上の感情を伝えずに留めた。

「……？　変なの」

沙耶子は首を傾げる。言動や仕草は、まだまだやはり子供なのだなとサワタリは微笑ましく思う。

普段の緊張から離れ、穏やかな時間を過ごせた事が何より彼女には嬉しかった。

「ねえ、エミさん」

即位しても尚、沙耶子は変わらずサワタリの事を「エミさん」と親しげに呼ぶ。それこそ正に二人の信頼の証なのであるが。

この時の沙耶子の口振りには、些か緊張が混じっていた。

「あの雲なんだろう。赤い」

サワタリの袖を引き、沙耶子は窓の外を指差す。

「どうかされましたか？」

彼女に示された窓の方角を覗き、サワタリもまた怪訝に眉をしかめた。

「……？」

この世界では時々異常な現象が観られる。それが全てウィルスに
関与している可能性は否定できない。

が、

この時サワタリは、それ以上に何か不吉な予感に捕らわれ、思わ
ず声を大にして叫んだ。

「機長、あれから離れて ！！」

8：東の天子（加筆ver）（後書き）

次回、アパッチvs ゴ

正解者は自腹でハワイ旅行へGO!!

前触れもなく、突然サワタリが大声を上げた直後だった。異変は前方を飛ぶ護衛機のリーダーもまた、捕らえていた。

一番機のガナー（火器担当員）が不意に視線をそちらに巡らせる。モニターを埋める、無数の三角形。

明らかに、異常。

直感がそれを危険と察知し、トリガーに指をかけた。

機銃を発砲する。M230・30ミリ自動機関砲の筒先が忽ち火を噴く。発射速度は毎分650発。

「光った!?!」

窓からその様子を見ていた沙耶子は、それが何事であるのか一瞬分からなかった。

熟練した輸送機の機長は、その異変が何を表すのか瞬時に悟り、こう告げた

「きゃっ!」

《掴まっついてください!》

その警告も刹那の事。

機体は突如傾き、直進飛行から大きく進路を変えた。オーバーバ
ンク。

唐突に真横から襲う巨大なGに、座席から沙耶子は振り落とされた。転げながらもサワタリがそれを受け止めた。

「機長っ!」

咎める彼女に機長は言い返した。

「すみません、緊急事態です!」

叫ぶ彼の表情に、焦りの色が滲んでいる。

事態が分からぬまま機体は進路を変更してゆく。

コースを外れた輸送機を追ひ、ヤマナカの二番機がそれを追送していた。

「一番機！ どうした！？ なぜ発砲している！？」 ヤマナカにはまだこの事態が飲み込めない。

先程モニターに光点として密集した謎の雲は、現在も尚彼らに急速接近中であつた。

バルカン砲が火を吐き続ける。何かを薙ぎ払う様、唸りを上げている。

「タチオカ、何をしている！？ こちらからは何も見えないぞ！？」
お前らの目は節穴か？

当の攻撃を下す一番機のカナ、タチオカは構わず発砲を続けていた。それを説明する理由など今は思いつかなかった。

上げるとすれば、勘だ。兵士としての勘が、彼の脳内に嫌な警告を発しているのだ

「タチオカっ！ おい！ 状況を説明しろ！」

耳元のレシーバーからはひっきりなしに仲間の警告が聞こえていた。残り弾はもう間もなく百を切ろうとしている。

前方の雲に突如異変が現れた。

一番機にさんざんタングステン弾を撃ち込まれた箇所。

そこを境に、わっと雲の形が二つに割れた。

（コイツは）

俺達を飲み込もうとしている。

タチオカの悪寒は上の操縦席へ アパッチは視界確保の為このよな配列をしているへと伝播した。途端に舵を切る。

ローターブレードが唸りを上げた。最大戦速。

コレクティブピッチレバーを上引き上げ、機体のトルクを上げ

る。推力が増し、機体は上方へ急上昇を始める。（間に合わないか！！）

謎の赤い雲は尚も機銃による鉄の洗礼を食らいつつ、ロングボウ・アパッチ3を挟み撃ちの形で捕らえようとしていた。まるでそれ自体に意志でもあるかの様、横に広がりつつ。

ヘリは尚も昇り続ける。その姿勢はほぼ垂直角。

九十度に機体を傾けつつ、左右から押し寄せる壁を逃れるため、アパッチは懸命に上昇してゆく。

G U N 0

残り弾がついにゼロを迎えた。

1200発の弾を撃ち終え、ガナー席のアイピースに絶望的な数字が表示された。

これを機とばかりに魔手はアパッチへ襲いかかった。

真横からドン、と衝撃が襲う。視界が赤一色に塗りつぶされた。

「何だこれは！」

コクピット内から二人の操縦士たちは見た。怪しげな雲の正体

それは大量の蝗^{いなご}。

飛翔蟬と呼ばれるバツタの大群移動。彼らは運悪く、それに巻き込まれてしまったのだ。

機体に。ブレードに。容赦なく打ち付けてくる虫の洪水。

「畜生！ 振り払えんのか！？」

悲鳴を上げるようタチオ力は操縦席側へと叫んだ。

「出力が上がらん！ 奴らの死体が、きつとローターの軸にまで絡まって」

サイクリックを握る彼の腕がぐくぐと揺れている。

制御不能な虫の嵐の中で、機体は揚力を失い弄ばれる様に下に流されていた。

「墜ちるぞ、おいっ」

カリカリッ、と、どこからか削る様な嫌な音が聞こえてきた。

それがウィルス汚染を受け、極端に顎が発達した蝗達による装甲を砕いてゆく音だとは、よもや彼らに知る由も無かった。

高度は徐々に下がり、機内は混乱の最中であつた。

この危機を脱するべく、タチオカは再びトリガに指を掛けた。コクピット後方。機体の左右に伸びるスタブウイング。

その先端に取り付けられた対空ミサイル・AIM NEXTに火を点ける。総計四発。一斉発射。

（それでも）

「食らいやがれッ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6575w/>

クレイジーラブユーダイフォーユー

2011年11月27日21時55分発行